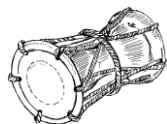


能は私の道標

中西 喜彦



一、はじめに

昭和31年4月鹿児島大学農学部に入學したころ、「人は何のために生きているのか」「人生は如何に生きるべきか」考えていました。その答えを得るため剣道部に入部しました。さらに大学の先生方を訪ねたり教会やお寺を訪問したりしました。専門課程に進んでは学内牧場の技官の方の家に間借りしたり学内牧場の宿舎に泊ったりさせてもらいました。しかし個人的な修行の方法などはある程度理解出来たものの、国や社会の在り方に対するヒントはあまり得られませんでした。

その頃近くに住んでおられた先生から謡

曲の同好会があることを教えてもらい、それに参加しました。能の素謡すうたいといって能のセリフ集を謡うだけのことですが、毎週、農学部のの先生が謡われるのに合わせて謡って曲目を増やしていきました。その中で能「花月」を知り、自分の人生の指針になると考えました。

鹿大を卒業後、九州大学院の農学研究科の修士課程に進学したので、福岡の実家にもどりました。その時、鹿児島大学で稽古をつけていただいた権藤道夫先生の紹介で能楽師に師事するようになりました。博士課程3年時に鹿児島大学農学部助手として赴任しました。福岡で師事していた能楽師が鹿児島にも来ておられたので引き続き稽古を続けました。ここで改めて素謡すうや仕舞、舞囃子などを本格的に習うようになりました。

二、私の生立ち

筆者は、昭和12年2月に福岡県添田町

（英彦山の麓）で生まれました。4歳の時に母が亡くなり父が再婚したので4人の兄弟が生まれて5人兄弟の長男として育ちました。高校時代までは父に最も影響を受けました。

丁度筆者が昭和20年6月小学3年生のとき、福岡市の大空襲があり、その年8月に終戦を迎えました。空襲を受けた父は家族を3か所に分散させ、私は壱貴山に単身で疎開しました。丁度私の高校時代までは終戦後の治安の乱れた時期で、父は警察の幹部として公私ともに大変な時期であっただろうと思います。そのせいで私は小学校5回、中学校2回、高校2回、水城学園時代迄転校を繰り返しました。戦後の最も混乱した時で、父の一番多忙な時代に学校生活を送ったことになりました。

父は中学1年の私に「自分はいつ死ぬかわからない。君は長男だから死んだときは宜し

く頼む」と話すとともに、「人間は地位や学歴よりも苦勞をしっかりとて物事の本質をよく見極められるようになることが大切である、巡査の時は楽しかったけれど今の署長家業は苦勞が多い」と言っていました。「実際に自分が亡くなった時に泣いてくれるのは家族だけだから」とも話していました。

「人生の目的は、学歴や地位や金儲けではなく、苦勞して実社会の実態を知ることである。最初は丁稚奉公から始めるとよい」という話もしていましたが、高校への進学者数も増えてきたためまずはどこか好きな大学に行くようにということで鹿児島大学農学部へ入学しました。

鹿児島大学で農業関係であれば静かな生活が送れるであろうと農学部を選び、生まれて初めて鹿児島島の地を踏むことになりました。

三、私の仕事内容

昭和39年5月、九州大学農学研究科博士課程3年時に母校の鹿児島大学農学部の中古に助手として採用されました。丁度、母校は戦後の学部内の改組が行われ、農学科、蚕糸学科、総合農学科を解組・再編して新しい畜産学科が前年の昭和38年に設置されたばかりでした。その中で私たちの畜産研究室だけが畜産の専門科で他の研究者たちは前述のような専門性をもって研究対象を畜産の方に向けていく時期でした。畜産学科の主任教授の西山久吉先生は学生時代の恩師でもあり助手としてできることは何でも加勢しました。

例えば、付属施設として種子島にあった牧場を薩摩川内市に移動新設することになっていました。また、動物飼育棟の新設や、研究棟の新設、専門の研究者の招聘など、研究以外の業務が山積していました。特に種子島か

らの牧場移転は、現在の薩摩川内市入来町に150ヘクタールの土地を購入して新たに畜舎や牧舎、研究事務棟建設へと進むのでした。専門家の中で最も若い私が現場の測量、造成の立ち合いなどを第一線に立ってやるようになりました。昭和43年に牧場が完成して開場しましたが土づくり10年、草づくり10年、牛づくり10年と言われるように、非常に多くの苦労がありました。一方、研究としては大学院時代に、西南団地の乳牛の泌乳量を向上させる基礎的研究を行いました。牧場の造成と細かい研究の両立を図りながら何とか完了することが出来ました。

①環境温度と泌乳ひにゅうの関係

自分の研究としては泌乳ひにゅうに対する環境温度の影響を調べることでした。妊娠したマウスは33℃の高温環境下だと子どもを育てることをせず、分娩した子どもをかみ殺して食

べてしまい、自分は元気にしています。しかし32℃では子供を育て始め、減食して発熱を抑え、自分の体成分を乳に回して、子どもを育てます。

離乳期には子どもは元気にそだちますが、親マウスはやせ細ってしまいます。

親ラットは32℃で子どもを育てますが、泌乳最盛期の夜間に死んでいました。しかし、子は元気になっています。その原因を探るために親の体温を測ると夜行性のため真夜中に体温が1℃上昇しそのため熱死することが分かりました。このように、泌乳というのは1℃の差で自分が生き残るか子孫を残すかの微妙な接点があることがわかりました。

一方、7℃の下でマウスを飼育すると採食量は著しく増加し、体重も増加し自分の生んだ子供以外の子どもを加えても十分に育てます。

これらのことは、動物は一定の条件下で必死に子孫を残そうと努力することが分かりました。西南団地での酪農を盛んにするにはいかに夏場の環境を快適にするかということが課題になると思いました。

②低栄養と繁殖の関係

次に低栄養と繁殖の問題について追及しました。

低栄養状態を50日ほど持続したままで死滅したラットの下垂体中の卵胞刺激ホルモン濃度はまだ高濃度を保っています。このことから、栄養条件が戻れば常に繁殖に対応できるものと考えました。低栄養下でラットを40日ほど飼育すると10日から性周期が乱れ始め、1か月ほど経つと完全に性周期が停止します。しかし、その時点の脳下垂体中の卵胞刺激ホルモンの濃度は、ラジオイムノアッセイ法で測定すると正常時の2倍から3倍

に増加しています。逆に飽食に戻すと1週間ほど経つと性周期は完全に回復します。

大学農学部附属入来牧場において、約10年間にわたり、妊娠分娩した放牧黒毛和種の雌牛約100頭について、体重の推移を月ごとに測定しました。その推移をみると妊娠中や授乳中にかかわらず、9月から体重が徐々に減少し、牧草がほとんど無くなる3月を底辺にして4月から増加していることが分かりました。乾燥や最冷時などは飼料を相当量補給してもこれらの大きな傾向は改善できませんでした。牛は一日に体重の10%の草を必要するといわれています。ところが、高地の草の生産量は9月から殆ど生産できません。そこで、夏場に干し草やサイレージを製造し冬場に備えます。しかし、西南団地は雨量も多くなかなか良好な冬用の飼料を用意することができません。

一方ラットでの実験では低栄養状態でも正常な栄養状態になると繁殖能力がすぐ回復することが分かりました。そこでできるだけ牧草地の平らなところを畑地化して9月に寒地型の牧草を散布して栽培して飼料が不足する12月から3月まで妊娠牛や授乳牛をその中に遊牧しました。これによって平地の舎飼い牛並みの繁殖能力が維持できることがわかりました。

③牛を用いたバイテク研究

凍結融解を20回繰り返して、完全に死滅した精子を一匹顕微鏡下で取り出し、体外培養した卵子に顕微授精します。さらに胚盤胞まで発育させ、授精適期の雌牛に移植し、生まれた子牛を生育させ、さらに妊娠させて健全な子牛を得ました。

その基礎技術として当時、体外での卵子の培養は2細胞ブロックといってそれ以上は体

外では発育しませんでした。私どもは、食肉加工センターで卵巣を採取し、その中から卵丘細胞を取り出します。その上で受精卵を培養すると容易に移植可能な胎盤胞に発育しました。それを入来牧場の雌牛に移植して子牛が得られました。

昭和63年、私は米国のウイスコンシン州立大学に5か月留学しましたが、生きた牛の卵巣を採取し体外で卵丘細胞を培養し、同様の結果を得ていました。丁度時期は同じでしたがその経済的な有利さは我々の方法がはるかに優れていると思いました。

④ミニブタを用いたバイテク研究

医学部動物実験施設専任教授の山内忠平先生から相談を受け、昭和53年に同腹のオス1頭、雌2頭の雑ミニ豚を研究室に導入しました。これを豚の繁殖や特に精子の研究に用いることにしました。10年ほど継続して

飼育すると毛色が白で家畜豚では6か月令で120キロになるものが、ミニブタでは25キロになります。丁度医学系で用いる実験動物としてミニブタが注目されはじめた時期でした。

県との共同研究では、試験場で頭数を増やして多頭飼育いろいろな適性を調べました。この集団は免疫に関係が深いMHC（主要組織適合性遺伝子）が一組しかない集団のため臓器移植の研究に適していることがわかりました。そこで畜産会社ジャパンファームに譲渡しクラウン研究所として、遺伝子型のはっきりした実験動物として供給することができるようになりました。鹿児島大学でも生物資源開発研究センター（異種移植分野）として研究が開始されました。

退職後、このことから（株）ジャパンファームクラウン研究所の技術顧問として3年間

勤めました。その後2年半前述の異種移植分野の特任教授として勤務しました。

四、能の魅力

お能の演目は約250曲あり、曲目ごとに主人公（シテ）の生き方が示されています。お能には5つの曲柄があります。神物「神」、修羅者「男」、鬘物「女」、雑物「狂」、鬼物「きり鬼」があります。それらの中には、万葉集、古今和歌集、源氏物語、太平記、平家物語などの文学作品や、地方の風土記などを題材にして神道や仏教の考えをもとに人物が描かれています。

63歳の時に先生にお願いして「花月」を福岡の大濠能楽堂で披露することが出来ました。さらに70歳の時に指導して頂いた宝生流能楽師石黒孝先生の能「花月」を鑑賞しその足で、自分の生誕地であり、物語の主人公が天狗にさらわれたという英彦山の麓に夫婦で行

き、花月が天狗にさらわれたという記念の場所や山伏たちの修行をしたという場所を確認しました。

この中では人間生活の行動がほぼ網羅されており、神道や仏教の考えをもとに人間世界の道德観を満たしているように思います。中でも現在筆者は、「花月」「高砂」「邯鄲」「三輪」の4曲に強く惹かれています。また、盲目の人物を主人公にした「弱師」や「景清」にも親近感を抱いています。

しかし、もう少し能の詳細を知りたくて65歳の大学定年退職後2年間上京し宝生流教授嘱託会東京支部に参加し、研鑽に努めました。

68歳の時に前年に新設された鹿児島県民交流センターの能舞台で、能「高砂」を演じその新設を祝いました。人生を祝福する能「高砂」や人生を終った時の能「邯鄲」を知



仕舞「三輪」 中西喜彦、第70回鹿児島謡曲連合会大会
(令和5年10月22日、於：かごしま県民交流センター)

ると、改めてお能は示唆に大変富んだものであると感じました。

最後に第70回鹿児島謡曲連合会大会では、能「三輪」の中の天岩戸物語を仕舞で演じました。筆者は、自分の人生をお能の中に反映させて演じることにより、何らかの安らぎを得られるように思った次第です。

私の感じる能の魅力は、一曲の中のシテ役の人生が一人によって演じられることにあります。

能は人の生き方には共同的な社会としての規範としては、わが国では神道、ヨーロッパではユダヤ教やイスラム教などが考えられています。個人的な規範としては、わが国では仏教、西洋ではユダヤ教やキリスト教が考えられるのではないだろうか。筆者は能の中に、いろいろな人の人生を見ることがよって、非常に自分の行く末を反映させること

が出来るように思いました。しかも能は、単なる劇として観るだけでなく自分でせりふを覚えたりエッセンスを加えたり、物語の中心の課題を舞で表したりして、一つの長い人生を一つのコマの中に要約できるように思いました。この能が室町時代に確立されて、現代まで約650年に渡って、ほぼ同じ形で継続されていることに非常に不思議な感覚を持っております。

五、「花月」のあらすじ

「花月」という名前の少年が英彦山で7歳の時にさらわれて国内の修験道の聖地を天狗に連れまわされて最後に清水寺でお寺の由来を紹介し、羯鼓舞を演じて生活しています。そこで我が子を探し求めた父親と再会し、二人で仏道の修行に旅立って行きます。ここに原文の要点を紹介します。

「これは花月という者なり。ある人我が名

を何とて花月というぞと問えば我ことふ。月は常住にして言うに及ばず。さて花の字はと問えば。春は花、夏は瓜。秋は果（このみ）冬は火。因果の果をば末期まで。「この花月の意味するところは太陽と月を表しています。すなわち太陽は、4つの季節を作り、因果の結果をも示しています。月はいつも現れるという意味です。

私の人生も要約するとこのようなもので「とられてゆきし山々をおもいやることこそ悲しけれ。」という所感に要約されると思います。

前述のように、能「花月」は人生の道標として活用しました。今度は、能「三輪」を日本国の一つの道標として推薦したいと思えます。

六、能「三輪」から、今後のわが国を考える。

私の生き方については前述のように、能「花月」について述べました。

次に、日本の行く末について能「三輪」で考えることが出来ます。まず、天岩戸物語を題材にしていますが、天照大神が、須佐能命の乱暴狼藉に堪えかねて天岩戸の中にお隠れになります。世の中が真っ暗になります。困った神々が岩戸の前に集まって神楽を奏して賑わいます。何かと天照大神が岩戸を内から開けられるとまた日が輝いて、みんなの面（顔）が白くみえたというところで「面白し」と言われたという神話の初めの物語と紹介されています。そして「伊勢と三輪とは分身一体のおんこと。いまさら何と岩倉や、その関の戸の日も明けてかくありがたき夢の告げ、覚めるやなごりなるらん。」でお能は終わります。

4年前の自民党総裁選挙の際に岸田現首

相と河野太郎氏と高市早苗氏が立候補されました。高市早苗氏は、故安倍元首相の推薦で100人以上の推薦者を獲得し実質上は一番多い数の推薦人を獲得されました。その時どのような経歴の人かと調べてみました。奈良県桜井市の畝美高校の出身と知って、能「三輪」を思い出しました。今年の9月の総裁選挙では故安倍元首相がご存命でないのどのようなものかと思っています。故安倍元首相の応援がなければなかなかむづかしいと思っております。しかし、最近の自民党の状況を見ると高市早苗氏に非常に有利な状況が起きています。目下、国内だけでなく米国においても「もしトラ」が「ほぼトラ」に変わり、ともにトランプ氏と対等にわが国の立場を主張できる第一人者は、高市早苗氏になると思います。

高市早苗氏は、皇統の維持と憲法の改正を

主張しておられます。わたしの考えでは、まず、自衛隊を戦える正常な軍隊にして、アメリカの79年に及ぶ米軍のわが国での占領を中止して欲しいものです。

神話で示された暗闇は日食ともいわれています。が実際は富士山の噴火によって長い間暗闇が続き農作物が出来なくなつて皆が集まつて相談したことを暗示しているともいわれています。

現在の世界情勢は、ヨーロッパにおける宗教戦争あるいは植民地支配その後は共產主義あるいはグローバリズムなどの考えの下で戦争が絶えません。第2次大戦後も各地での戦争が頻発しています。わが国もいよいよ紛争に巻き込まれる瀬戸際にあります。いわゆるこれらの暗雲に強い光を当てその原因を知る必要があります。すなわち「面白く見える」の諺を現代にあてはめたいものです。

七、能「鵄」で、対米関係を考える。

最後に能「鵄」で今後の世界情勢の行く先を考えて見たい。鵄の正体を紹介すると頭は猿、体は狸、尾は蛇、脚は虎に、それぞれ似ていたという怪物です。御所の屋根上に毎夜飛来し不気味な声で鳴き皆を悩ませます。天皇は源頼政に弓で打ち取るように命じます。そこで源頼政は弓で撃ち落とします。亡骸をウツボ舟に乗せて淀川に流します。

歴史上の秦川勝は赤穂に流されて、地方に貢献し神として祭られています。

世阿弥は秦川勝のことを自分の先祖と言っています。その秦川勝のことを偉大な先祖として書くのではなく、得体の知れない鵄にたとえて淀川に流してしまうという物語を作っています。秦川勝は聖徳太子の財務大臣ともいわれ、京都御所の造営をはじめ多面的な活躍をした人物です。秦川勝はユダヤ系の渡

来人と言われています。

能「鵺」の面白さは物語の筋だけでなくシテ役が天皇の役と源頼政の役と鵺の役を連続的に一人で演じるところです。特に鵺が矢に当たって仰向けにそりかえり、そのままウツボ舟に乗せられて淀川に流されていく様を演じるところです。どう演じるかは各流派の見せどころです。

現在は、各地で戦争が多発し混沌たる状態にあります。米国はそのすべてに関与しており、国際金融連合及び deep state と言われるユダヤ系の人々によって権力構造が占められています。まさに鵺のように得体のしれない存在です。現代の鵺は民主主義・自由主義・平等主義、さらに株・為替・ネットバンキングなどと鳴いています。

現実の米国社会は 建国時代の理念を失いまさに金権社会になっています。建国当初

はアングロサクソン系の実利主義とキリスト教の博愛精神を掲げていました。今は人種構成も大きく変化し、まさに国の方針を明確にできない状態になっています。

自分だけ、金だけ、今だけの社会になっているように思います。

わが国がこの鵺に対応するには、弓矢として実体経済をもって対応する必要があると思います。例えばトヨタをはじめとする企業は各国の実態に即した製品を提供し、あるいは大谷翔平のように金銭を目的にするのではなく実態の向上を追求することだと思っています。

いわゆる「道心に食あり、食に道心なし」ともいわれるように日本が永年培ってきた道徳心を追求しながら生活していけば、自然に道は開けてくると思われます。

（鹿児島謡曲連合会前会長、鹿児島大学名誉教授、炬ばたセイ談会会長）